



この人に聞きました

## 特定の人に使いやすいものは みんなにも使いやすい

バリアフリーアドバイザー

すずき

鈴木 ひとみ氏

バリアフリーアドバイザーとして幅広く活躍されていますが、なかでも車椅子の開発ではハード面だけでなく、メンタルな面も考慮して携わっていると伺っています。どのようなコンセプトで開発に臨まれているのでしょうか。

鈴木 1日座っていてもくたびれない車椅子、それからおしゃれでかっこいい、とにかく、悲しいものではない、そういう車椅子の開発に取り組んでいます。3年前にデザインした車椅子は“BELLA（ベラ）”というんです。今座っているこの車椅子がそうなのですが、自動車と同じように車椅子にも一つひとつ名前があるんですよ。“BELLA”はイタリア語で「きれい」という意味で、私が名づけました。

「車椅子を使うようになったら、もうおしまいだ」なんて、お年寄りもよく言いますし、皆さんもおっしゃいますよね。それは、車椅子イコール悲しいものの象徴だからなんですよ。でもそれは、間違っていると思うんです。足の悪いご老人や障害者の家族とか、特に医療関係の方がよく「ちょっと歩けるのなら、車椅子を使わないで頑張って歩きなさい」とおっしゃいます。そうすると言われた方は良い子になり、頑張っちゃうんですよ。確かに残存機能を鍛えることは大事ですが本当はくたびれて、外に出る気力もなくなるんです。趣味がリハビリというのならいいのですが。

それよりもむしろ、ちょっと歩けるけれど、車椅子を使った方がもっと行動範囲が広がるとか、もっと楽しいことがいっぱいできるとか、そ

ういう考え方があってもいいと思うんですよ。車椅子を使うというのは悲しいことではなくて、自分の行動範囲を広げる便利なツールと考え、どんどん活用していくというのが大事だと思います。

そのためには、悲しいデザインであってはいけないのです。乗っている人が座っていてもくたびれない車椅子。病院に備え付けのものやデパートなどの玄関にも置いてあるような車椅子は、自分で操作するのにはとても疲れるんです。基本的に自分が操作するというのではなく、人に押しってもらうという考え方で作られているものですから。

よく市長さんが、子供たちと一緒に「1日車椅子体験」というのがありますね。そして一番最後に必ず、「車椅子の人の気持ちが分かった」「ちょっとした段差でも上がれなかった」というのが必ず締めくくりの言葉なんですよ。でも、そこにすごく危険性を感じるのです。なぜかという、それを経験した子供たちが、「車椅子は大変だ」「こうならなくてよかった」と思うことです。それがもう一歩進んで、「もし自分がこうなったら、一生立ち直れない」という恐怖が記憶されてしまうことなんです。

愛知万博が、環境に優しい、人に優しいというコンセプトで開かれています。私が開発に協力している車椅子メーカーの椅子が535台使われています。前輪にショックアブソーバーを入れたため、点字ブロックに乗ってもガタガタ響かないんです。実はこの車椅子、本来の使われ方をしていると思うのです。というのは、車椅子に乗るほど

ではないけれど長く歩くのは大変な人とか、ちょっと疲れた人などが使ったり、炎天下、お年寄りが椅子代わりに使ったり、荷物を置いてキャリー代わりに使ったりされているんです。将来的には、こういう使われ方もして欲しいのです。愛知万博に行かれたら、ぜひ、皆さん乗ってみて下さいね。

**最近、ユニバーサルデザインという考え方が急速に広まっていますが、鈴木さんが考えるユニバーサルデザインとはどのようなものですか。**

鈴木 バリアフリーというのは、障害者や高齢者にとってのバリアをなくすということですよ。ユニバーサルというのは、もっと広い範囲のことだと思います。健常者も障害者も、ご老人も若者もみんなが共有できるということがユニバーサルということですよ。

これは直接私が携わったものではないのですが、6年前にある飲料会社にお問い合わせに行きました。車椅子の人のために自動販売機の取り出し口を高くして欲しいということと、コインの投入口をもう少し何とかして欲しい。「できません」と言われたんですね。というか「やりません」と言われたんです。自動販売機は、一番下から取ると上から順番に落ちてくる形になっていて、取り出し口を高くするといっぱい入れられないから不経済だと言うのです。

ところが作ってくれたんですよ。それがヒットしまして、ミニスカートでもしゃがまないでいい、お年寄りでもかがまないでいい、荷物を持っていても取りやすい。車椅子用にと作ってもらったものが、実際には一般の人のためになっている。日本の技術は素晴らしいですね。自動販売機内を飲料缶等が無駄なく下から上に上がる技術が開発された。これが本当のユニバーサルではないかと思うんですね。どなたにとっても幸せだということ。

他にも例はありますよ。エレベーターが来るとピンポンと音が鳴り光が点滅しますよね。最初は耳の不自由な人とか目の不自由な人の補助機器だったんですが、他の人たちにも便利です。これ

も言ってみればユニバーサルなんだと思います。

**日々の生活や活動を通じて、特に感じておられることについてお話しいただけますか。**

鈴木 皆さんあまり気が付いていないと思いますが、日本の公園にある車椅子用トイレは鍵がかかっているのが多いんですよ。どうして鍵をかけているのですかと聞くと、「ホームレスが住む」と言うのですね。それは分かるんですが、そのトイレが管理人室の隣だとか普通のトイレの並びにあるのならいいのしょうけれど、大体ポツンと離れた所にあるんです。これは、車椅子用トイレの広さの基準が厳しくて、作る場所がないから、仕方なく遠くに作って、それを管理しきれず鍵をかけちゃうということですよ。

公園の条件もいろいろですから、一律に基準を決めるのではなくて、広いのが作れる所は作る、そうじゃなければ一般のトイレよりは少し大きくて、ゆったりではないにしても何とか車椅子で入れるものを工夫する、あるいは多機能トイレみたいなものとか、いろいろなタイプのものを作って、それもみんなが使える形にすれば良いと思います。日本では、車椅子用トイレに一般の人が入ると後ろめたいような感じだったりしますよね。車椅子用にも一般の人がどんどん入っていけば、ホームレスの心配もなくていいですし、経済的ですね。

商品開発で言うと、障害者など特定の人に本当に使いやすいものを開発して、それが他の人たちにも使いやすいというものが本物だと思っています。体に障害を持つ人がいて、周りの人が助けるといっただけでなく、いろいろな条件の人にとって便利で住みやすいこと、それがユニバーサルということだと思います。

(2005年7月13日東京にて 編集委員会)

〔鈴木ひとみ氏プロフィール〕・1962年大阪生まれ。81年ミス・インターナショナル準日本代表選出、以後モデルに。84年交通事故で頸椎を損傷し下半身の自由をなくす。現在、執筆、講演活動のほか、企業のバリアフリーアドバイザーとして活躍・スポーツにも挑戦し、2004年アテネパラリンピックに射撃で出場。